

発電乃湯
次世代型エネルギー施設による木密地域再生の提案
The bathhouse generating powers
Proposal of mokumitsu regional revitalization by next-generation energy

佐藤信治¹, ○出山亮²
 Shinji Sato¹, Ryo Deyama²

Territorial society by the Great East Japan Earthquake, has been built up for many years becomes a blank waiting further, various problems became a relief in the Fukushima Daiichi nuclear power plant accident. And now, Japan is about to enter the energy turning point. From top-down, which has supported the city by large-scale power generation until now, I have moved to the era of bottom-up type Ichinohe the city and to generate electricity. From having to power on the scale of the town, bottom-up type, is fraught with potential to become a cornerstone of the community as a community. Therefore, focusing on the public bath that has the scale of the city as well, not only functions as a city hot water in the past, and the plan as a power plant in the region, to return to day-to-day space a public bath be forced out of business, creating a community of town measure.

1. はじめに

東日本大震災により、長年築き上げられてきた地縁社会はまっさらな白紙となり、福島第一原発事故では様々な問題が浮き彫りになった。そして今、日本はエネルギーの転換期を迎えようとしている。これまでの大規模発電によって都市を支えてきたトップダウン型から、まちや住宅一戸一戸が発電するボトムアップ型の時代へ移行している。ボトムアップ型の発電所は、まちのスケールで発電することから、これからのまちを結ぶ拠点になると考える。

そこで、同じくまちのスケールを持つ銭湯に着目し、かつての町湯としての役割だけではなく、地域の発電所として機能させる。廃業に追い込まれる銭湯を日常的空間に回帰させ、木密地帯再生の核として計画する。

2. 計画背景

2-1 消えゆくある日本の文化

わが国において銭湯は、江戸時代から明治・大正を経て第二次世界大戦前まで、地縁社会のコミュニティセンター的役割を果たしていた。共同浴場としての社会的機能を担うだけではなく、毎日その地域の人びとが集まることによって、情報交換の場ともなっていたのである。しかし戦後は持ち家制度の促進や生活の近代化の名のもとに浴室の家庭化が進み、銭湯は衰退の一途をたどった。そして一方、コミュニティセンターと名づけられた施設が各地域につくられるようになったが、銭湯でのような活気はそこには再現しなかった。大都市における社会の急激な変化が、地縁社会のあり方を変質させてしまったからである。

2-2 建て替えが急務とされる木密地域

東京には、山手線外周部を中心に木造住宅密集地域が広範に分布している。木密地域は、道路や公園等の都市基盤が不十分なことに加え、老朽化した木造建築物が多いことなどから、地域危険度が高く、「首都直下地震による東京の被害想定」2006年東京都防災会議においても、地震 火災など大きな被害が想定されている。

2-3 新エネルギー導入による木質バイオマス利用

木質廃材の多くを占める建築物の解体・新築工事に伴って発生する建設発生木材は、2005年に制定された建設リサイクル法により再資源化、再利用が推進されている。また、発電に伴うCO2排出量が少ない新エネルギー源の利用促進政策によるバイオマス発電事業の拡大を通じて、燃料としての有効活用が求められている。

3. 基本計画

本計画では、木密地域における建物倒壊、同時多発的な火災を防ぐためにも、木密地域不燃化を目指し、まちの区画ごとに建て替えをはかる。建て替えで生じる建築廃材を銭湯の燃料として利用し、給湯時の発電や発熱を利用し、銭湯から木密地域へのエネルギーというカタチで還元させ、エネルギー供給システムを構築する。



Fig.1: Conceptual diagram of the energy supply

1 : 日大理工・専任講師・海建 Department of Oceanic Architecture & Engineering , CST. , Nihon-U.

2 : 日大理工・学部・海建 Department of Oceanic Architecture & Engineering , CST. , Nihon-U.

4. 対象敷地

4-1 敷地選定

選定要件として東京都震災対策条例に基づいた地域危険度測定調査から最も建て替えが急務とされる地域を選定する。建物倒壊危険度、火災危険度、総合危険度を測定し、危険性の度合いを 5 つのランクに分けて評価した結果、最も危険性の高いレベルとされるレベル 5 の地域が足立区南部から荒川区、台東区東部、葛飾区西部、墨田区、江東区北部、江戸川区北西部が導き出された。

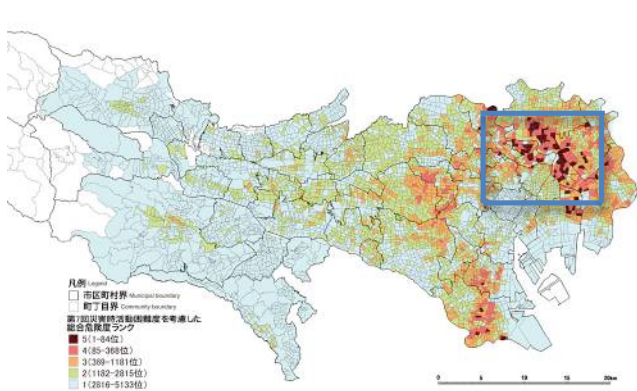


Fig.2: Risk map overall town

なかでも区市町別の総合地域危険度で第 3 位に位置し、「火災」の危険度では建物の 7 割が全焼するとされている東京都足立区千住を計画地として選定する。

4-2 銭湯のまち

足立区は、都内でも銭湯が多いことから銭湯のまちとして住民たちから愛されている。最盛期には 150 軒もの銭湯が軒を連ねていたが、現在ではその数は激減し 47 軒となっている。計画地である千住界隈だけでも最盛期には 36 軒もあったが、いつしか次々と姿を消してゆき、現在では 5 軒しか営業していない状況である。いずれも歴史ある銭湯であり、なかでも「キングオブ銭湯」として知られる大黒湯は銭湯ファンの間でも名高い人気を誇っている。



Fig.3: Landscape with bathhouse

4-3 梅の湯



Fig.4: Plan Place and Umenoyu

戦禍を免れ、今なお多くの古風な町並みが残る北千住。このまちにある全国に名を轟かす有名銭湯も内装は、意外なほど近代的に改装されているのだが、一際古態を留めているのが梅の湯だった。しかし、主人の目の病気から 2011 年 2 月に暖簾を下ろすこととなった。見事なほど、古態を残すものから順に失われる千住の名銭湯たち。年々高層ビルが増え、古くからの町並みが狭間に埋もれゆく北千住も、のっぼな煙突が見えなくなった真の理由に人々が気付くころには、「銭湯のまち」としての面影はすでに無いであろう。

5. 建築計画

銭湯はもとより、一つのプロトタイプから計画され、そのまちによって細部を変えるなどして地域性を生み出してきた。本計画でも一つのプロトタイプとして提案し、その地域がもつ"色"を銭湯という型枠に落とし込む。発電のプロセスを銭湯というカタチによって可視化、空間化し人々の生活とエネルギーの在り方を結びつける建築こそ、今求められる次世代都市に必要な建築なのではないかと考える。



Fig.5: Conceptual drawing

6. 参考文献

- [1] 町田忍:銭湯の謎 扶桑社 2001 年
- [2].中野栄三著「入浴・銭湯の歴史」1994 年
- [3] 東京都都市整備局:地域危険度調査